

認知症カフェを立ち上げて3年間の活動

～オレンジカフェ身延山の活動報告～

榎木 博之

1 はじめに

身延山大学では、2016年11月に認知症カフェである「オレンジカフェ身延山」を開設し、2020年3月までの3年間で合計30回実施してきた。オレンジカフェ身延山は、身延山大学として実施してきた活動であるが、学生が主体となって企画・運営を担ってきた。学生の学びと大学としての地域貢献を同時に行ってきた活動である。筆者は設立から3年間、オレンジカフェ身延山の活動に携わってきた。本論では、身延山大学で認知症カフェを立ち上げてから3年間の活動を報告する。

2 オレンジカフェ身延山を立ち上げた経緯

身延山大学の教育理念は、行法（実践）と学問（専門的見識）をとおして社会貢献できる人材を育成することである。これは大学内での学びだけではなく、地域に出向き自ら活動を行うことで社会貢献を図っていくことも含まれている。そのためサービスラーニングやインターンシップ等の科目を設置し、これらの活動を学生たちに積極的に推奨している。近年、大学は研究や教育だけではなく「地域貢献」が問われる状況になっている。身延山大学のある山梨県南巨摩郡身延町は高齢化率40%を超え、更に人口減少が顕著な地域である。そのため「高齢化と人口減少が顕著な地方にある大学」である身延山大学が地域貢献を行う手段として、認知症カフェの立ち上げに至ったのである。

認知症カフェは厚生労働省が2015年1月に出した「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」の中で、各市町村で実施することが求められるようになったものである。新オレンジプランの中で認知症カフェは、「認知症の人やその家族が、地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う場」¹⁾としての役割が期待されている。しかし、2016年当時において身延町内に認知症カフェは存在しなかった。そのため参加希望者は、山梨県内の他市まで出かけている状況であった。

そこで身延山大学で認知症カフェを立ち上げることを検討し、身延町とも話し合いを重ね、開設準備を進めていった。2016年11月にプレオープンを実施、そして2017年3月から本格的にオープンすることとなった。名称も当時中心に活動を行っていた筆者のゼミに所属している学生同士で話し合い、「オレンジカフェ身延山」とすることになった。身延町の身延山久遠寺に

ある門前町商店街の空き店舗の一角で実施することとした。活動資金は朝日新聞厚生文化事業団による「ともにつくる認知症カフェ開設応援助成」の申請を行い、300近くの応募団体の中から選出され、3年間助成を受けて活動を行うことができるようになった。

3 オレンジカフェ身延山3年間の活動

(1) 活動経過

2017年3月から本格オープンし、その後は毎月1回（2月・8月は休止）、土曜日か日曜日の13時30分～15時30分までの2時間、実施している。2020年3月現在まで、合計30回実施した。（表1）企画・運営は学生が中心で、福祉を学んでいる者だけではなく、僧侶を目指している者も参加している。更に身延山大学の卒業生や地域住民もボランティアスタッフとして、運営の一員になっている。毎回、平均9.6名（表2）のスタッフで運営を行っている。

参加者は子どもたちも含めて合計225人（のべ人数）、1日平均7.5人（表2）であった。参加者の多くが門前町在住の高齢者と子どもたちである。参加者のニーズとしては、介護保険を利用していない高齢者が平日週1回は町内のいきがいデイサービスに参加しているが、週末は自宅でテレビを見て過ごすことが多くなるため、オレンジカフェ身延山に参加し認知症の予防をしたい、という者が多かった。また、門前町の子どもたちも参加できるように学習支援を同時に開催し、学生たちが宿題を見る場としている。

オレンジカフェ身延山に子どもが参加するようになった経緯として、2017年5月以降、活動中に遊びに来るようになった。子どもたちは高齢者と接するというより、学生との交流を楽しみにして遊びに来ている感覚であった。そこで学生たちから、「オレンジカフェ身延山で子どもとの関わりも大切にしていきたい」という声上がり、同じ時間・空間で子どもと高齢者が一緒に過ごすことができるように、「子どもの学習支援活動」も同時に行っていくことになった。現在は、オレンジカフェ身延山と子どもたちへの学習支援の両方を行っている。参加者がコーヒー等を飲んで歓談している時に、子どもたちは宿題等の勉強を学生と一緒にしているのである。

子どもたちが来るようになった当初は会場を走り回ることもあり、高齢者から「ここはあなたの来る場所ではない」と怒られてしまう場面もあった。しかしその後、机に向かって勉強する時間を作ったことで、子どもが会場を走り回ることもなくなり、全員でゲームや昔の遊び、作品づくり等を行う時には、高齢者と子どもが一緒になって楽しむことができるようになっていく。その時に高齢者は、子どもたちに注意するような場面もあり、正に年長者としての役割を発揮していることもあった。子どもたちからも「今日はおじいちゃん、おばあちゃんがいるから走り回らない」と話す者も出てきて、意識の変化も見られるようになった。また、孫・ひ孫の付き添いという意識で参加する高齢者もいた。その人たちは自身の中で、孫・ひ孫の付き

表1 オレンジカフェ身延山の活動状況

回数	開催日	参加人数	運営者
1回目	2016年11月12日(土)	10人	11人(学生7人・卒業生2人・教員2人・ボランティア1人)
2回目	2017年3月11日(土)	15人	10人(学生7人・卒業生2人・教員1人)
3回目	2017年4月15日(土)	10人	10人(学生4人・卒業生3人・教員2人・ボランティア1人)
4回目	2017年5月14日(日)	9人(子ども1人)	9人(学生6人・卒業生2人・教員1人)
5回目	2017年6月11日(日)	5人(子ども1人)	12人(学生9人・卒業生2人・教員1人)
6回目	2017年7月8日(土)	8人(子ども2人)	16人(学生8人・卒業生5人・教員2人・ボランティア1人)
7回目	2017年9月16日(土)	5人(子ども2名)	10人(学生5人・卒業生2人・教員2人・ボランティア1人)
8回目	2017年10月7日(土)	8人(子ども2人)	7人(学生4人・教員2人・ボランティア1人)
9回目	2017年11月12日(土)	3名(子ども2名)	6名(学生4名教員1名ボランティア1名)
10回目	2017年12月15日(土)	7名(子ども2名)	7名(学生5名卒業生1名教員1名)
11回目	2018年1月13日(土)	5名(子ども2名)	13名(学生8名卒業生3名教員1名ボランティア1名)
12回目	2018年3月11日(日)	9名(子ども2名)	9名(学生8名教員2名)
13回目	2018年4月21日(土)	9名(子ども2名)	6名(学生5名教員1名)
14回目	2018年5月13日(日)	5名(子ども5名)	8名(学生4名卒業生2名教員1名ボランティア1名)
15回目	2018年6月3日(日)	7名(子ども4名)	13名(学生9名卒業生3名教員1名)
16回目	2018年7月14日(土)	1名(子ども1名)	11名(学生8名卒業生2名教員1名)
17回目	2018年9月15日(土)	4名(子ども0名)	7名(学生4名卒業生1名教員2名)
18回目	2018年10月14日(日)	10名(子ども6名)	9名(学生6名卒業生1名教員2名)

19回目	2018年11月10日（土）	2名（子ども0名）	9名（学生6名教員1名ボランティア1名）
20回目	2018年12月15日（土） 子ども食堂と同時開催	15名（子ども11名）	9名（学生7名・卒業生1名・教員1名）
21回目	2018年1月12日（土）	11名（子ども8名）	10名（学生7名・卒業生2名・教員1名）
22回目	2018年3月9日（土）	8名（子ども6名）	6名（学生2名・卒業生2名・教員2名）
23回目	2019年4月13日（土）	9名（子ども6名）	7名（学生3名・卒業生2名・教員2名）
24回目	2019年5月12日（日）	10名（子ども6名）	14名（学生9名・卒業生3名・教員2名）
25回目	2019年6月8日（土）	17名（子ども12名）	10名（学生9名・教員1名）
26回目	2019年9月14日（土）	9名（子ども1名）	10名（学生5名・卒業生3名・教員2名）
27回目	2019年10月19日（土）	2名（子ども2名）	10名（学生8名・教員2名）
28回目	2019年11月9日（土）	2名（子ども2名）	9名（学生8名・教員1名）
29回目	2019年12月14日（土）	4名（子ども2名）	7名（学生5名・教員2名）
30回目	2020年1月11日（土）	8名（子ども2名）	7名（学生4名・卒業生2名・教員1名）
	2020年3月7日（土） （コロナウイルス感染拡大防止のため中止）		

添いという意識が強いため、作品づくりやゲーム等に参加したがない傾向があった。しかし孫・ひ孫が取り組んでいる姿を見て、一緒に行くようになっていった。これらのことは、オレンジカフェ身延山で子どもが参加するようになった効果と考えられる。

このように未就学児から小学生、大学生、そして高齢者と、オレンジカフェ身延山は地域の中で正に多世代交流の場となっていったのである。

1年ごとの比較（表2）を見ていくと、参加人数（のべ人数）は2016・2017年80人（1回平均8.0人）、2018年67人（1回平均6.7人）、2019・2020年78人（1回平均7.8人）であった。子ども

表2 1年ごとの参加者の推移

実施年	回数	参加人数	1回平均数	子どもの参加人数	子ども1回平均数	スタッフ参加人数	スタッフ1回平均数
2016・2017年	10回	80人	8.0人	12人	1.20人	98人	9.80人
2018年	10回	67人	6.70人	33人	3.30人	94人	9.40人
2019・2020年	10回	78人	7.80人	47人	4.70人	96人	9.60人
合計	30回	225人	7.50人	92人	3.07	288人	9.60人

※人数はのべ人数

も参加人数（のべ人数）は2016・2017年12人（1回平均1.2人）、2018年33人（1回平均3.3人）、2019・2020年47人（1回平均4.7人）であった。参加人数、2018年に減少したが2019・2020年に微増しているのは、高齢者よりも子どもの参加が増えていることが影響している。子どもたちの参加人数が増えている要因として、門前町商店街で実施していることがあげられる。オレンジカフェ身延山を実施するのは土・日曜日のいずれかであり、商店街は営業している時である。そのため子どもたちの親は仕事をしており、子どもが自宅でゲームしている家が多い、という課題があった。そこでオレンジカフェ身延山がオープンしている時には、自宅から出て学生や友人、高齢者と過ごすことは子どもたちにもその親にとっても貴重な機会になったのである。

スタッフ人数（のべ人数）は2016・2017年98人（1回平均9.8人）、2018年94人（1回平均9.4人）、2019・2020年96人（1回平均9.6人）とほぼ変動はない。その中で学生の参加（のべ人数）は、2016・2017年で59人（1回平均5.9人）、2018年65人（1回平均6.5人）、2019・2020年61人（1回平均6.1人）であり、毎回学生が6名ほどスタッフとして参加している状況であった。

(2) 活動プログラム

1日の活動プログラムを紹介したい。（表3）毎回、13時30分からカフェをオープンしている。オープンして最初に僧侶を目指す学生による法要から始めている。参加者は高齢者も子どもも学生たちのお経を聴きながら、ずっと手を合わせお祈りしている。その後は少し身体を動かすために、頭を使う体操や最近では椅子に座って行う体操を実施している。体操後はお茶やコーヒーを飲みながら談笑している。この時に子供たちは宿題等の学習を行い、学生がマンツーマンで一緒に学ぶようにしている。談笑後、折り紙や紙花、季節に応じた作品づくり、頭を

表3 1日の活動プログラム

13：15頃	学生が自宅まで迎えに行き、一緒に歩いて来店
13：30	カフェオープン 学生による法要 座って行う体操（頭を使う体操）
14：00頃	コーヒー・お茶等を飲みながら歓談
14：30頃	頭を使うクイズ、季節の遊び、学生による出し物等 終了後、コーヒー・お茶等を飲みながら再び歓談
15：30	閉店

使うクイズ、昔の遊び、季節の音楽といった学生による出し物等を行っている。この時は、高齢者と子どもを分けるのではなく、一緒にクイズや遊びを楽しんでいる。それだけではなく、カフェでの様子を写真に撮り、その場で参加者に渡すようにしている。これらの活動が終わった後は再び談笑しながら、参加した感想等の記載をお願いしている。

(3) オレンジカフェ身延山に関連するその他の活動

オレンジカフェ身延山を継続的に活動していく中で、認知症カフェに関するその他の活動も行ってきた。(表4)①の認知症カフェ啓発活動では、地域のイベントで出展を行っていった。毎年11月3日に実施される「みのおまつり」でブースを出展し、町民に認知症のことを知ってもらうためのクイズを実施したり、オレンジカフェ身延山の活動をポスターにして展示したりして周知を図っていった。社会福祉法人身延山福祉会が実施しているふれあいマルシェでもブースを出展し、認知症やオレンジカフェ身延山の啓発活動を行った。

②の認知症カフェ情報交流会では、身延町内で認知症カフェを実施している団体と身延町役場職員とで意見交換を行っているところに学生と参加するようにした。身延町における認知症カフェの役割や課題を他の団体のスタッフや身延町役場職員と話をすることで、オレンジカフェ身延山の存在意義を確認したり、今後の活動をどのように展開していけばいいかのヒントを得たりすることができた。この会に参加することで学生たちが、オレンジカフェ身延山が身延町内の貴重な社会資源の一つとして位置づけられていること、認知症カフェを開催する上で他の団体にも共通の課題があることなどを体感できる機会になっている。

表4 その他の活動

①認知症カフェ 啓発活動	<p>i みのぶまつり (2017年11月3日・2018年11月3日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェの活動を展示 ・認知症啓発のクイズ <p>ii ふれあいマルシェ (2019年3月17日)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・認知症カフェの活動を展示 ・認知症啓発のクイズ
②認知症カフェ情 報交換会	<p>身延町内認知症カフェ開設団体による意見交換会</p> <p>i 2017年5月24日 身延町すこやかセンター</p> <p>ii 2018年1月18日 身延町すこやかセンター</p> <p>iii 2018年7月18日 身延町すこやかセンター</p> <p>認知症を考えるつどい 2019年3月15日 身延町総合文化会館</p>
③オレンジカフェ 身延山活動報告	<p>i 「大学における地域福祉活動」第8回みのぶボランティアの集い 2019年17年2月4日 身延町役場 報告者：榎木・古屋(学生)・小泉(学生)</p> <p>ii 「身延山大学における地域福祉活動―バリアフリーマップ作成から認知症カフェ立ち上げまで―」身延山大学保護者会講演会 2017年6月6日 身延山大学図書館 報告者：榎木</p> <p>iii 「CCRCシンポジウム 山梨がめざす『生涯活躍のまち』 身延町版CCRC～認知症カフェの取り組み～」2017年11月22日 山梨県立大学 報告者：榎木</p> <p>iv 「オレンジカフェ身延山及び学習支援活動」学生イニシアティブ事業 成果報告会 山梨県立大学 2018年2月15日 報告者：松村(学生)・松島(学生)</p> <p>v 「子どもの学習支援活動を併設して―オレンジカフェ身延山―」 認知症カフェフォーラム2018年2月2日・3日 朝日新聞本社 報告者：榎木・松村(学生)・深沢(学生)</p> <p>vi 「オレンジカフェ身延山と子どもの学習支援」 身延町ささえあい町民フォーラム 2018年6月28日(木) 身延町総合 文化会館ホール 報告者：齋藤(学生)</p> <p>vii 「こどもの学習支援活動」学生イニシアティブ事業成果報告会 2019年2月7日 山梨県立大学 報告者：齋藤(学生)・池原(学生)</p>

<p>④学会発表・論文 報告</p>	<p>学会発表</p> <p>i 「仏教系大学における地域福祉活動の意義—認知症カフェを立ちあげまで—」日本仏教社会福祉学会、2017年9月10日 種智院大学</p> <p>ii 「学生が認知症カフェを主体的に行う教育効果に関する研究～学生からのインタビューで見えてきたこと～」日本仏教社会福祉学会、2018年9月30日 身延山大学</p> <p>iii 「『認知症カフェ』と『子どもの学習支援』の同時開催を試みて～学生たちが行うことの効果と課題～」第20回日本認知症ケア学会 2019年5月25日～26日 国立京都国際会館</p> <p>論文報告</p> <p>i 「地域包括ケアシステムにおける認知症カフェの役割」身延山大学学部紀要第18号 2017年10月</p> <p>ii 「仏教系大学における地域福祉活動の意義～認知症カフェを立ち上げて～」 日本仏教社会福祉学会年報第49号 2019年3月</p>
<p>⑤新聞・雑誌掲載</p>	<p>i 新聞掲載</p> <p>山梨日日新聞 2017年6月20日（火）</p> <p>朝日新聞 2017年2月10日（金）</p> <p>朝日新聞 2018年2月16日（金）</p> <p>朝日新聞（山梨県版） 2019年2月6日（水）</p> <p>教育学術新聞 2019年4月17日（金）</p> <p>ii 雑誌等記事</p> <p>「厚生福祉」 2017年2月21日</p> <p>「月刊福祉2017年7月号」全国社会福祉協議会</p> <p>「医療と介護の総合サポートマガジン メディサポ 2017年秋」</p>

③のオレンジカフェ身延山の活動報告では、さまざまな機会に筆者と学生が口頭でこれまでの取組を伝えていくようにしてきた。身延町内では、身延町社会福祉協議会が主催している第8回みのおボランティアの集い、身延町が行った身延町ささえあい町民フォーラム、大学が主催する身延山大学保護者会講演会にて、筆者や学生がオレンジカフェ身延山の活動を報告するとともに、町民に認知症カフェの周知を図っていった。朝日新聞厚生文化事業団が主催している認知症カフェフォーラムにも参加し、朝日新聞本社にて学生とともに大学が行う認知症カフ

エの意義も含めて活動報告を行った。報告を聞いた参加者から、子どもの学習支援を同時開催していることへの質問が多く反響が大きかった。山梨県大学コンソーシアムが主催している学生イニシアティブ事業成果報告会には、オレンジカフェ身延山と同時開催している子どもの学習支援の報告を学生が行い、2018年度には奨励賞を受賞した。このようにこれまで行ってきた活動を報告することにより、オレンジカフェ身延山を広く周知するだけでなく、学生たちにとってはプレゼンテーション力の向上にも繋がっていった。

この他にも日本仏教社会福祉学会、日本認知症ケア学会にて学会発表を行ったり、論文報告を行ったりして、大学が認知症カフェを行う意義について明らかにしていくようにした。また朝日新聞、山梨日日新聞等で記事として取り上げてもらい、身延山大学で認知症カフェを行っていることが広く周知されるようになっていった。

4 活動の効果

これまで3年間オレンジカフェ身延山を実施してきて、活動の効果としては(1)地域の社会資源として定着、(2)多世代交流の場への変化、(3)学生への教育効果の3つが考えられる。

(1) 地域の社会資源として定着

身延町内では2つの認知症カフェがあり、オレンジカフェ身延山はその1つである。これまで活動を行ってきたことで、身延町内の関係機関から「学生たちの力を借りたい」と声をかけられることが増えた。町内で行われる「みのぶまつり」「ふれあいマルシェ」「みのワーク」「町内フォーラム」といったイベントに呼ばれ、学生が認知症カフェの取り組みを報告したり、出展して啓発を行ったりといった活動の幅を広げることができた。これらのことから、オレンジカフェ身延山が地域の社会資源の1つとして定着してきたと言える。

高齢者や子どもたちにとっては週末の居場所としても定着しつつあり、参加者である子どもの親からは「週末は仕事があるので子どもたちは部屋でゲームばかりしている。このような場所があるのはありがたい」といった声を聞くことが何度かあった。

(2) 多世代交流の場への変化

最初は高齢者を対象にして実施していた。実際に活動のPRも高齢者の人たちに届くように、チラシ等で情報発信していった。しかし活動場所である商店街の子どもたちが遊びに来るようになって以降、高齢者だけの居場所ではなく、子どもの学習支援も一緒に行うようになり、多世代交流の場に変化していった。最初は子どもたちの自由な行動に高齢者が叱責する場面も見られたが、その後は高齢者と子どもが一緒の場にいることに違和感なくなっていった。

オレンジカフェ身延山が、高齢者、大学生、そして子どもと多世代が集う場所へと変化していったのである。

(3) 学生への教育効果

オレンジカフェ身延山は企画・運営を身延山大学の学生が主体になって行っている。そのため、学生たちが「考えて実践する」ことを意識するようになった。毎回の準備段階で前回の課題を踏まえて次回をどのように行えばいいか考え実際に活動を行う、という流れが定着している。そのため「考えて実行し、そしてまた考える」ことの必要性に気づき、このような実践が「卒業して福祉現場で働くようになった時に活かされている」と卒業した学生たちから聞くこともあった。

5 今後の課題

現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、活動を休止している。この状況がいつまで続くか見通せないため、今後の展望を描きづらくなっている。オレンジカフェ身延山はこれまで学生が主体となり企画・運営を行ってきた。そのため活動の中心を担ってきた学生たちが卒業していく中で継続していくことは、以前から課題となっていた。そして活動中止の状況が長引けば、オレンジカフェ身延山を継続して行くこと自体が難しくなってしまう。このような状況ではあるが、再開するようになった時に地域の社会資源の1つとして活動できる体制を整えておくことが大切である。高齢化率の高い身延町において、学生が主体となって活動するオレンジカフェ身延山を貴重な社会資源の1つとして維持していくこと、これこそが今後の課題になると考えている。

3年間の活動の中で、筆者のゼミ生としてオレンジカフェ身延山の活動の中心を担ってきた宮澤由希さん、古屋法子さん、小泉美佳さん、松村美七海さん、深沢辰哉さん、齋藤さくらさん、池原里穂さん、そして卒業生としてボランティアに参加してくれた日向成美さん、鈴木里菜さんがいたからこそ、これまで継続的に活動を行うことができたと感じている。また、これまで活動に参加してきた多くの学生及び卒業生に感謝したい。



オレンジカフェ身延山の活動を行った学生・卒業生

〈参考文献〉

- 1) 厚生労働省 「認知症施策総合戦略（新オレンジプラン）」（2015）

〈キーワード〉

認知症カフェ、社会資源、多世代交流、学生主体